

さけます資源増大対策調査事業

(要約)

高橋 進吾

I サケ

目 的

サケ親魚の来遊構造等を把握するとともに、来遊予測のための基礎資料を得る。

材料および方法

水産振興課の「さけ沿岸漁獲速報」により旬別の沿岸漁獲尾数を整理するとともに、気象庁等が公表している海況情報等をもとに漁獲変動要因を検討した。

結果および考察

平成 20 年漁期の各海域での沿岸漁獲尾数は、太平洋 97.2 万尾(前年比 93%)、津軽海峡 15.6 万尾(前年比 67%)、陸奥湾 0.3 万尾(前年比 92%)、日本海 6.8 万尾(前年比 68%)、県全体では 120 万尾(前年比 87%)であった。

気象庁等が公表している海況情報では、親潮(100m 深水温 5℃以下)沿岸分枝の勢力は弱く、11 月までは北退傾向、12 月に入り平年並み～南下傾向で推移した。この親潮の動向と太平洋海域での漁獲動向に対応が見られ、例年の盛漁期である 11 月より遅く、12 月上旬にも来遊のピークがみられたのが特徴的であった。

II サクラマス

目 的

サクラマス主要水揚げ港におけるサクラマス標識魚の漁獲状況と定置網に混入したサクラマス幼魚の入網状況を把握し、サクラマス事業の基礎資料とする。

材料および方法

(1) 標識魚漁獲状況調査

平成 20 年 1～6 月に白糠、大畑町、大戸瀬、深浦の各漁港における標識魚尾数および標識部位を銘柄別に記録した。

(2) 幼魚混獲調査

平成 20 年 3～6 月に尻労、関根浜、佐井村牛滝、深浦町黒崎の各地区の定置網で混獲したサクラマス幼魚について、尾叉長および重量の測定、標識の確認を行った。

(3) 回遊経路調査

リボンタグ標識魚の再捕報告を整理した。

結果および考察

(1) 標識魚漁獲状況調査

各地区の調査尾数と標識魚尾数から算出した混獲率は、全県の平均混獲率は 0.4% で、大畑地区が 1.2% と高かった。

(2) 幼魚混獲調査

各地区で混獲された幼魚の再捕尾数は、尻労地区が 123 尾と多く、次いで関根浜地区の 77 尾で、牛滝・黒崎地区では再捕報告がなかった。

尻労地区で再捕された標識魚 6 尾のうち 1 尾は、平成 20 年春に老部川で放流されたリボンタグ標識魚であった。関根浜地区で再捕された標識魚 13 尾のうち 1 尾は、平成 20 年冬に山形県で放流されたリボンタグ標識魚であった。単純に全県の再捕尾数と標識魚尾数から算出したサクラマス幼魚の標識魚混獲率は 9.5% であった。

(3) 回遊経路調査

青森県で放流したリボンタグ標識魚の平成 20 年の再捕報告は、成魚 6 尾、幼魚 5 尾の計 11 尾であった。そのうち成魚 6 尾は、平成 19 年春に老部川で放流されたものであった。